1) ガバナンス部門（部門責任者）

辻康夫（教授・政治理論）

2020 年度の研究活動およびそのアウトプットについて。

私の研究テーマは多文化主義およびマイノリティをめぐる政治理論であり、当センターにおいては、多文化主義とガバナンスをめぐる研究に従事している。多文化主義はその単純な外見に反して、多様な政策課題に対応する複雑な構造を持ち、これに対応していくつかのアプローチにカテゴリ ー化することができる。私はこれを「文化アプローチ」「支配・抑圧アプローチ」「コミュニティ・再建ア プローチ」として定式化し、それぞれの論理と相互の関係を検討してきた。2020 年度にセンター内においては、4件の公開講演会を企画し、司会・コメンテーターをつとめた。これらのうち、2件はアメリカ大統領選挙に関するもの、他の2件は、コ『ロナ感染対策をめぐるものであったが、ポピュリズム、マイノリティ政策、司法制度と立憲主義、マルチレベル・ガバナンス、正義論などが中心テーマとなり、これらへの参加をつうじて、新たな知見を得ることができた。個人研究としては、多文化主義の「文化アプローチ」に検討の中心を移し、マイノリティ言語をめぐる政策論論争の構造の分析に従事した。その成果の一部を日本解放社会学会の大会で報告し、これにもとづく論文を 3 月に公刊した。この論文においては、従来主流であった文化アプローチのなかでも、キムリッカに代表されるリベラル系の議論の展開と、その問題点を分析した。このほかに、多文化主義に関する書籍の書評論文 1 点を公刊した。

その他（教育活動ほか）

その他（教育活動ほか） 学部向けには、法学部専門科目「政治学」の講義を、公共政策大学院および研究大学院向けには、「公共哲学」および「政治学特別講義」を担当した。全学教育 についてはオムニバスの総合講義「価値対立時代の対話学」のうちの 2 回分を担当した。

論文

論文標題	誌名	発行年	頁
マイノリティ言語の地位をめぐる考察:リベラル多文化主義論の有効性をめぐって	『北大法学論集』71-6	2021	pp.57-89
ヨーロッパに生きるムスリムの統合の可能性:安達智史『再帰的近代のアイデンティティ論』(晃洋書房、2020 年)	『図書新聞』,3468 号	2020	p.5

学会発表

発表課題	学会等名	年月日	発表場所
マイノリティ言語の地位をめぐる考察	日本解放社会学会	2020 年 9 月 5 日	オンライン開催